



TITLE:

ミシェル・フーコーと啓蒙の問い

AUTHOR(S):

水嶋, 一憲

CITATION:

水嶋, 一憲. ミシェル・フーコーと啓蒙の問い. 経済論叢 1995, 156(4): 102-122

ISSUE DATE:

1995-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/45011>

RIGHT:

經濟論叢

第156巻 第4号

木崎喜代治教授記念號

献 辞	菊 池 光 造	
公衆衛生の誕生	阪 上 孝	1
フランス啓蒙期の「陪審制」論	石 井 三 記	28
根源への無限の階梯	長 尾 伸 一	56
Social Democracy and Sustainable Development	Nobutaka NAGAOKA	83
ミシェル・フーコーと啓蒙の問い	水 嶋 一 憲	102
アリストテレスの經濟思想	森 岡 邦 泰	123
社会の学問の革新	田 中 秀 夫	141

木崎喜代治 教授 略歴・著作目録

平成7年10月

京 都 大 學 經 濟 學 會

ミシェル・フーコーと啓蒙の問い

水 嶋 一 憲

I 啓蒙への回帰／啓蒙からの出発

「このテキストは哲学的考察の場にまったく新しいタイプの問いを出現させているように私には思える。」ミシェル・フーコーは、コレージュ・ド・フランスにおける1983年度の第一回目の講義で、カントの『啓蒙とは何か』を正面から取り上げ、このように切り出した¹⁾。死の間際に活字にされたこの講義でフーコーの呈示するカント像は、かつて『言葉と物』のなかで分析された哲学者のイメージとは著しく異なった印象をわれわれにあたえる。『言葉と物』（とくにその第9章）におけるカントは、ごく単純化して言えば、〈独断論のまどろみ〉から哲学を日覚めさせつつも、〈人間学的眠り〉へとそれを嚮導するような蝶番のごとき位置をしめていたのであり、したがってその評価もまた両義的であらざるをえなかった。しかるにいまやフーコーは、〈啓蒙とは何か〉という問いへのカントの答えのなかに「新しいタイプの問い」の出現を探知し、それを「現在への問い、現在性への問い」としてポジティブに受けとめようとするのである。「カントのこのテキストにおいてはじめて現われるように私が思う問いとは、現在への問い、現在性への問いである。それは以下のような問いを意味する。すなわち、今日、何が起きているのか。いま、何が起こって

引用に関する注記——本稿で引用または参照されるフーコーのテキストのうち、昨年刊行された全四巻の著作集（Michel Foucault, *Dits et écrits*, I-IV, Paris: Gallimard, 1994）に収録されているものについては、著作集の略号 DE と該当する通し番号を併記する。

1) DE-351, *Qu'est-ce que les Lumières?*, p. 679（小林康夫訳「カントについての講義」，第二次『エビステメー』創刊0号，朝日出版社，1984年，174ページ）

いるのか。そして、そのなかでわれわれがともにそれぞれで在り、また私が書いているまさにこの瞬間を規定しているこの〈いま〉とは、いったい何なのか。』²⁾

同じく、この講義の終わりの部分でフーコーは、カントに由来する「批判の二つの大きな伝統」が存在することを指摘している。一方は、「真理の分析論」という言葉で特徴づけられる伝統であり、「真の認識が可能となる諸条件」を問うことを旨とする。他方は、「現在の存在論、われわれ自身の存在論」と呼ばれるものであり、そのエートスは、「われわれの現在性とは何か。可能な諸経験の現在＝現実的領域はいかなるものか」という問いを絶えず提起しつづけることからなる。そして、これら二つの批判の伝統または問いの様態を確認したうえで、フーコーはこう締め括るのである。「……現在われわれが直面している哲学的選択とは次のようなものであると私には思える。すなわち、真理一般の哲学的分析論として呈示される批判哲学を選ぶことができるのか、それとも、われわれ自身の存在論、現在性の存在論という形態をとる批判的思考を選ぶことができるのか、というものである。そして、ヘーゲルからニーチェとマックス・ウェーバーをへてフランクフルト学派へといたる、この後者の哲学の形態こそが、そのなかで私が仕事をしようとしてきた考察の形態を基礎づけてきたものなのである。』³⁾

ところで、このようなフーコーの見解に接してハーバーマスは、深い困惑を覚えずにはいられなかったように見受けられる。なぜならそれは、啓蒙ひいては近代の企図に対立する、ゆえに自分の論敵でもあるはずの人物によってなされた、カントを端緒とする伝統への共属の表明であったのだから。フーコーの死の直後に発表された追悼文のなかで、ハーバーマスはこう問いかけている。「近代の哲学的思考、つまり、そのつどのわれわれのアクチュアリティに向けられ、われわれの現在に刻み込まれた哲学的思考に対するこのように肯定的な

2) DE-351, p. 679 (邦訳, 175ページ)

3) DE-351, pp. 687-688 (邦訳, 185ページ)

理解は、どのようにして彼の容赦のない近代批判とかみあうのだろうか……啓蒙の伝統につらなる思想家としてのフーコーの自己理解は、まさにこの近代の知の形態に対する彼の見まがいのような批判と、いったいどのように調和するのだろうか。』⁴⁾ これらの設問に対するハーバーマスの解答は、つまるところ、『啓蒙とは何か』を積極的に評価したフーコーの晩年の講義と、それまでの一連の近代批判の仕事とを和解させるすべは最終的には存在しないというものであった。それら二つの立場のあいだの緊張関係は、フーコー自身の思考に孕まれた根本的矛盾を証すものにほかならず、死を間近にしてようやくフーコーはそうした矛盾を認知するにいたったということ、これこそハーバーマスがその追悼文の末尾に書きつけた結論だったのである。「フーコーはアクチュアリティによって傷ついた権力批判を真理の分析論と対立させたが、この対立のために、前者が後者から借りてこななければならないはずの規範的基準が失われてしまい、そのために矛盾に巻き込まれた。……フーコーは彼の最後のテキストに属するこの講義で、彼が爆砕しようとしたはずの近代の哲学的ディスクルスの呪縛圏に再び捉えられたのだが、それもおそらくは、この矛盾の力によるものなのだ。』⁵⁾

フーコーのプロジェクトは根本的な矛盾につきまとわれていたのだと断ずる、ハーバーマスのこの所見は、翌年に刊行された『近代の哲学的ディスクルス』のなかで子細に述べられた議論と基本的に同型である。また、これを支持ないし補強しようとする、影響力のある論考もこれまでにいくつか公表されており、その内部では総じて、以下のような合意がすでにできあがりつつあるように思われる⁶⁾。すなわち、啓蒙の普遍的諸価値に対するフーコーのラディカルな反

4) ユルゲン・ハーバーマス「現代の心臓に打ち込まれた矢とともに——カントの『啓蒙とは何か』についてのフーコーの講義をめぐって」, 河上倫逸監訳『新たな不透明性』, 松籟社, 1995年, 176-177ページ。

5) 同書, 180ページ。

6) cf. James Schmidt and Thomas E. Wartenberg, "Foucault's Enlightenment: Critique, Revolution, and the Fashioning of the Self", in Michael Kelly (ed.), *Critique and Power: Recasting the Foucault/Habermas Debate*, Cambridge: MIT Press, 1994, pp. 283-314.

駁は、その理性批判において強調され、さらにはその権力理論において一般化されてきたものである以上、晩年の講義におけるカントの召喚は、結局、それまでの仕事の統一性と一貫性を改めて問いに付すことにしかつながらなかったのだ、と。

じかしながら、われわれは、ハーバーマスの論議を過少評価する意図はもたないものの、それを基軸に形づくられた合意に対して強い疑念を抱かざるをえない。なぜなら、そうした合意の形成にあずかっている議論のほとんどが、フーコーとカントとの、そしてまた啓蒙との関係をめぐる些か性急な解釈にもとづいているように思われるからである。したがって、われわれがまず取り組むべきなのは、そのような解釈を突き崩すことにほかならない。またそれによって、フーコーの権力理論を、啓蒙に対する糾弾と相関的なものとして捉えようとする視座に転換をもたらすことが可能となるはずだ。だが、そのためには、〈啓蒙とは何か〉という問いへのカントの答えをめぐって繰り広げられた、フーコーの多面的な考察を、できるかぎり精確にたどりなおそうとする試みが不可欠である。そのような試行の過程においてのみ、晩年のフーコーによるカントの召喚が、死を前にしての矛盾の吐露でもなければ、アイロニーをこめた韜晦の身振りでもなく、ましてや啓蒙への突発的かつ全面的な回帰や転向などではなかったということ、しかもすでにその数年前に、啓蒙に反対するためではなく、まさにその逆に啓蒙への問いから出発して、〈統治術〉ないし〈統治技法〉という新たな問題設定が導入されていたことが詳らかにされるだろう。

そのさい、われわれが真っ先に着手すべきことは、フーコーの『啓蒙とは何か』に対する関心が、その晩年にいたって急浮上したものの、つまりは死の前年に限られたものであったとするような臆断を捨て去ることである。ハーバーマスを始めとする人々が囚われているこの通念は、フーコーの最後の8年間における思考の軌跡を注意深くあとづけることによって、その足場を掘り崩されるであろう。

ともあれ早速、支配的な観念に抗して、一つの画然たる事実を注視すること

から始めたい。すなわち、『性の歴史』第一巻『知への意志』（1976年）から第二巻『快楽の活用』（1984年）にいたるまでの「長い回り道」の途上で、フーコーがそのつど視点と力点を移動させながら、少なくとも三回にわたって、『啓蒙とは何か』の読解に取り組んでいたという事実である。そのうちの一つ、1983年1月のコレージュ・ド・フランスでの講義については、ハーバーマスの言及に絡めて、すでに簡単に触れておいた。また、それら三つのなかでおそらくもっともよく知られたものは、同年の秋にアメリカ合衆国で行なわれた講演であろう。そこでフーコーは、カントとボードレーを並べながら、「われわれ自身の批判的存在論」について語っていたのだった⁷⁾。そして最後に、これら二つにさきがけて、1978年の春にフーコーは、その「批判とは何か」と題された講演において、すでに『啓蒙とは何か』を参照しながら、「批判」と「啓蒙」の関係をめぐる興味深い分析を展開していたのである⁸⁾。

要するに、フーコーは、『啓蒙とは何か』に一度かぎり回帰したのではなく、少なくとも三度、そのたびに読みを変奏させながら立ち返っていたということである。われわれはまずこの事実を念頭におかねばならない。〈啓蒙とは何か〉という問いに対するカントの答えは、フーコーにとって、その思考を励起し挑発するような問いを産み出す、一種のジェネレーターとして稼働しつづけていたのである。したがって、フーコーとカントそして啓蒙との関係を理解するためには、三回にわたる各々のパフォーマンスを詳細に検討することが重要であろう。以下ではまず、それらのうち、もっとも早い時期に行なわれた講演について見ておくことにしたい。

7) *DÉ-339, Qu'est-ce que les Lumières ?*, pp. 562-578 (石田英敬訳「啓蒙とは何か」、『ルブレザンタシオン』第5号、筑摩書房、1993年、4-14ページ)

8) Michel Foucault, *Qu'est-ce que la critique ? [Critique et Aufklärung]*, *Bulletin de la Société française de philosophie*, 84^e année, n° 2, avril-juin, 1990, pp. 35-63. なお、この講演はフーコーの死後出版されたものであり、著者の校閲を受けていないため、著作集には収録されていない。

II 批判とは何か

かつてフーコーは、『言葉と物』における〈人間の死〉の宣言や、『構造主義』に対する自己の理論的立場などを争点とする活発な論争の渦中であって、「作者とは何か」という題の講演を行なったことがある。そして、それから9年後の1978年5月、フランス哲学会主催の研究会に再度招かれたフーコーは、同じグループをまえにして、「批判とは何か」という新たな問いを投げ掛けたのである。

この講演に関してまず着目すべきなのは、これから問いに付されようとしている「批判」という概念が、ほかの何かに仕える手段や道具などではなくて、それ自体一つの自律的な「態度」であるとすぐさま措定されている点である。冒頭の箇所で明かされているように、フーコーは、「批判的態度」と称されるものの系譜学に取り掛かろうとしているのだ。「……西洋近代（経験にしたがい大まかに15—16世紀以降としておく）において、いわば批判的態度と呼ぶことのできるような、考え・話し・行動するある種の仕方、実在し・知られ・なされている事柄とのある関係、社会と文化との、そしてまた他者たちとの関係が、生起したように私には思える。……この批判的態度の歴史を作成するには、いくつもの道筋が存在する。私はただ、一つの可能な道筋、もう一度言うが、他にもいくつもありえるであろう道筋のうちの一つを呈示したいと考える。」⁹⁾

こうして、批判的態度の歴史を形作る一つのヴァリエーションが呈示されることになるのだが、そのさい留意しなければならないのは、それが、「統治術」(art de gouverner) と呼ばれる、人々を全体的かつ個別的に統治する技法の展開過程と密接に絡み合ったものとして描き出されているという点である。さしあたりフーコーは、そうした技法の原型を、「キリスト教的牧人」または「キリスト教教会」に求めている。それらによって、次のような考えがもたらされたというのである。すなわち、救済へと導かれるためには、各々の個人が、

9) *Ibid.*, pp. 36-37.

生きているかぎり恒常的に、かつその生の細部にいたるまで、何者かによって統治されねばならない、あるいは統治されるがままにしなければならない、という考えである。そして、このような統治と服従の関係を成り立たせるものこそ、「良心の指導」に端的に表わされているような「統治術」にほかならず、長いあいだこれは、空間的にも数量的にも比較的限られた規模の宗教的諸集団と結びつき、またとりわけ、修道院の事例に顕著なように、その内部で実践されてきたのだった¹⁰⁾。

しかしながら、15世紀以降、そして宗教改革以前に、人々を統治する技法に「真の爆発」が生じたとフーコーは論定する。この場合、「爆発」という言葉は、二重の意味において理解されねばならない。まず第一に、「転位」という意味で。つまり、人々を統治する技法およびそれを実施するための方法という主題が、宗教的中心を離れて、世俗社会のなかへと移動し、拡大するにいたったということである。第二に、「波及」という意味で。つまり、この統治術がさまざまな領域に波及し、浸透していったということである——いかにして子供を統治するか、いかにして貧者と物乞いを統治するか、いかにして家族を統

10) *Ibid.*, p. 37. 1978年頃からフーコーは、西洋における政治的合理性の形成を、古代ギリシア・ローマおよび初期キリスト教世界にまで遡って探究するという、広大なプログラムを推し進めはじめていた。またその過程において、「統治」(gouvernement)の主題とともに「統治技法」(gouvernementalité)という独自の概念装置が新たに導入されることになるのだが、その全容を把握するためには、本稿で取り上げた「批判とは何か」の他に、少なくとも以下の一連のテクストを参照する必要がある。DE-239, La "gouvernementalité", pp. 635-657. DE-291, "Omnes et singulatum": vers une critique de la raison politique, pp. 134-161 (北山晴一訳「全体的なものと個的なもの——政治的理性批判に向けて」, ミシェル・フーコー他『フーコーの〈全体的なものと個的なもの〉』, 三交社, 1993年, 所収) DE-363, Les techniques de soi, pp. 783-813 (田村俣訳「自己のテクノロジー」, ミシェル・フーコー他『自己のテクノロジー』, 田村俣・雲和子訳, 岩波書店, 1990年, 所収) DE-364, La technologie politique des individus, pp. 813-828 (田村俣訳「個人にかんする政治テクノロジー」, 同書所収)

また、この「統治技法」の問題設定をめぐる研究論文としては、以下のものがすぐれている。Colin Gordon, "Governmental Rationality: An Introduction", in Graham Burchell et al. (eds.), *The Foucault Effect*, London: Harvester Wheatsheaf, 1991, pp. 1-51. Dominique Séglaud, "Foucault et le problème du gouvernement", in Christian Lazzeri et Dominique Reynié (sous la direction de), *La raison d'Etat: Politique et rationalité*, Paris: PUF, 1992, pp. 117-140. Michel Senellart, "Michel Foucault: gouvernementalité et raison d'Etat", *La Pensée politique* 1, 1993, Paris: Gallimard-Seuil, pp. 276-303.

治するか、いかにして軍隊を、さまざまな集団を、諸都市を、諸国家を統治するか、いかにして自己の身体を、自己の精神を統治するか、等々、といったかたちで。「いかにして統治するか、私はこれこそ、15ないし16世紀に発生した事柄の提起した根本的な問いかけのうちの一つであったと思う。この根本的問いに対して、増大の一途をたどろうとしていた統治術——お望みならば、教育術、政治術、経済的術策、云々と列挙していてもよい——のすべてと、同じく増大しつつあった統治制度——統治という語が当時もっていた広い意味においての——のすべてが、答えたのであった。」¹¹⁾

「いかにして統治するか」という問いの爆発、これこそがフーコーによれば、近代ヨーロッパ社会を特徴づける根本的要素の一つであったのだ。このような大胆かつ犀利な視点に重ね合わせるようにして、さらに注目すべき次のような見解をフーコーは述べている。すなわち、「いかにして統治するか」というこの問いは、「いかにして統治されないか」という問いと切り離しえないものだったのだ、と。注意しておきたいのは、この後者の問いが、統治術そのものに対する全面的抵抗へと純化されることはありえないということだ。重要なことは、「われわれは統治されることを望まない、われわれはまったく統治されたくない」と言うことではなくて、「いかにして——そのように、それによって、かくかくの原則の名において、しかじかの目標のために、そうした方法で、そんなふうに、そのために、それらの者たちによって——統治されないか」という問いを、絶えまなく問いつづけることである¹²⁾。諸個人を全体的かつ個別に対象とする統治の技法の全般化は、それらを警戒し、回避し、制限し、変容させようとするさまざまな仕方、つまりは、「批判的態度」と呼ぶことのできるものと不可分であったわけであり、またそれは、「根本的アナーキズム」や「本源的自由」といった観念に昇華ないし還元されることを拒むものであったのだ。かくしてフーコーは、「批判」という概念を次のように定義するに

11) *Ibid.*12) *Ibid.*, pp. 37-38.

たる。「……それゆえ私は、批判というもののごく基礎的な定義、その一般的特徴づけをこう呈示しておくことにする。すなわち、それは、しかじかの仕方
で統治されない技法である、と。」¹³⁾

こうした一般的定義を示したすぐあとで、フーコーはかかる批判的態度が三つの歴史的領域を拠点として実際に行使されたことを指摘している。まず第一の拠点は、人々の統治が基本的に精神的な技法にかかっており、教会の権威または聖書の教導権と結びついていた時代におけるものである。この場合、聖職者の権威に対する抵抗は、聖書への回帰、聖書に含まれた真正性の探求というかたちで実行された。つまり、批判は、聖書との関係において展開されたという側面を有しているわけである。第二の拠点は、世俗社会におけるものであり、主権者の統治への抵抗の中に見出される。この場合、統治とそれが命じる服従に対する批判は、普遍的かつ譲渡不可能な諸権利にもとづいて行使されたのであり、ゆえにこれは自然法の問題構成に通じるものであった。そして、第三の拠点は、より一般的に権威と真理との関係におけるものであって、この場合、ある権威が真理であると述べる事柄への批判は、その確実性を問題にすることによって行使された。「聖典、権利、科学。聖書、自然、自己との関係。教導権、法、教条主義に内属する権威。どのようにして、統治技法の全般化と批判との相互的な働きかけによって、西洋文化の歴史において必要なものと私の思う諸現象が発生させられたかが理解できよう……だが、とりわけ、次のことが理解されるだろう。すなわち、批判の源とは、基本的には、権力・真理・主体のあいだの、各々を互いに結びあわせると同時に、そのうちの一つを他の二つに結びつけるような諸関係の束であるということが。そして、統治の全般化が、社会的実践の現実性のただなかにおいて、ある真理を後ろ盾にした権力のメカニズムによって諸個人を従わせることにかかわるような運動であるとするなら、よろしい、私はこう言うことにしよう、批判とは、真理に対してはそれが権力としてもたらす諸効果を問いただし、権力に対してはそれが真理の諸言説とし

13) *Ibid.*, p. 38.

て働くさまを問いたす権利を、主体がみずからに与えるような運動である、と。そう、批判とは、自発的不隷従の技法、熟考された不従順の技法のことであるだろう。批判の基本的機能とは、真理の政治と一言で呼ぶことのできるもののゲームのなかで、非従属化を推し進めることであろう。』¹⁴⁾

このような仕方では、批判という概念の諸々の起源と展開を概観しながら、その基本的機能を明示したあとでフーコーは、批判についてのみずからの定義が、カントが啓蒙に対して与えた定義とさほどかけ離れたものではないと示唆するにいたる。統治と批判のインターフェイスに注がれていたフーコーのまなざしには、カントによる啓蒙の定義に含まれた四つの側面が注目に値するものとして映ったのである。すなわち、まず第一に、カントが啓蒙を、権威への従属によって保たれている未熟状態との対比において定義したということ。第二に、この未熟状態が、他人の指導なしにはみずからの悟性を使用できないという無能力によって特徴づけられているということ。第三に、この無能力が、一方の側における権威の過剰性と、他方の側における決意と勇気の欠如とのあいだの相関関係によって規定されているということ。そして最後に、未熟状態と啓蒙との戦いが交えられるアリーナが、宗教・権利・認識の三領域であり、これらはさきにフーコーが、統治技法の全般化と批判的態度の現出のあいだの関係を論じたさいに言及していたものであったということ。このようにして、啓蒙についてのカント的定義と批判についてのみずからの定義のあいだの相同性を確認したフーコーは、改めてカントへと問いを差し戻し、いかなる仕方でもカントが啓蒙との関係において批判を定義しているのかを再検討しようとするのである。「仮に実際にカントが、啓蒙に先立つこの批判の運動の全体を指して啓蒙と呼んでいるのだとすれば、彼はみずから批判として理解しているものをどのように位置づけるのであろうか。』¹⁵⁾

周知のように、『啓蒙とは何か』の冒頭の箇所には、「あえて知れ！」

14) *Ibid.*, p. 39.

15) *Ibid.*, p. 41.

(*Sapere aude!*) という有名な章句が引かれている。知る大胆さをもて、自身自身の悟性を使用する勇気をもてというこの命令が、啓蒙の標語として掲げられているわけである。しかし、フーコーの指摘によれば、この認識することへの勇気は、カントにおいては結局のところ、『純粹理性批判』で示されたように、認識の限界を認知する勇気以外のなにものでもない。「批判とは、カントの目から見れば、知に対して次のように言うもののことであろう——君は自分がどこまで知ることができるのかを知っているのか？ 望むだけ論議せよ、しかし君はどこまで危険を伴わずに論議できるのかを知っているのか？」¹⁶⁾ さらにフーコーは、さきにあげた標語と符を交わしあう、もう一つの声に耳を傾ける。その声とは、フリードリヒ二世による次のような呼びかけの声である——「諸君はしたいだけ何についてでも意のままに論議せよ、しかし服従せよ！」このようにしてフーコーは、カントのなかに認識と権力の、あるいは批判と権力の相互作用が存在することを認めたとえで、こう結論づける。つまり、カントにおいては、主権者への服従と自律性が対置されているわけではないということ、換言すれば、認識の限界の確定による自律性の発見と服従せよという命令の受容とが共存しているということである。いや、むしろこう言うべきであろう、「服従せよという命令がまさに自律性そのものを基礎としている」¹⁷⁾と。

要約するなら、統治技法と批判的態度との相互関係を系譜学的にあとづけてきたフーコーは、みずからが浮き彫りにした批判の定義とカントによる啓蒙の定義との相同性を示唆する一方で、カント以降、またカントを原因として、批判と啓蒙との関係にずれが持ち込まれるようになったと指摘しているのである。「いかにして統治されないか」という問いと結びついていた実践的批判が、カントを蝶番として、「どこまで認識することができるのか」という問いと結びついた認識論的批判へと変換されてしまったのであり、それ以後、認識の正当

16) *Ibid.*17) *Ibid.*

性を歴史的に調査しようとする分析手法がきわめて頻繁に採用されることになる。カントは啓蒙の可能性を開きながらもそこから批判を後退させてしまい、その結果、そうした批判のなかに啓蒙が強制的に収容されてしまうようになった。したがって、重要なことは、そのような道筋を逆向きにたどりなおすことにほかならない、とフーコーは考える。「支配との関係において認識の問いを提起しなければならないのだとすれば、それはまず第一に、そして何よりも、統治されないというある種の内発的な意志、この内発的意志から出発して、すなわちまた、カントが述べたように、未熟状態から脱しようとする個人的かつ集団的な態度から出発して、なされねばならないであろう。」¹⁸⁾

このようにして、〈批判とは何か〉という問いから出発したこの講演は、カントを両義的な回転軸としながら、〈啓蒙とは何か〉という問いへと最終的にたどりつく。そしてこれは、フーコーがこの講演の標題として着意しながらも、その選択を思いとどまったものであった。「あなたがたは、私が自分の講演に、当初そうであったタイトルを、なぜつけられなかったか、なぜあえてつけなかったかを理解されることだろう。そのタイトルとはこうであった。すなわち、〈啓蒙とは何か〉。」¹⁹⁾ こうして、〈批判とは何か〉という問いかけは、その展開の終わりにいたって、〈啓蒙とは何か〉という最初に想定されていた問いへと回帰をはたす。また同時に、最後に置かれたこの問いは、ほかならぬ〈啓蒙とは何か〉という問いかけの新たな始まりに向けて放たれた一本の矢でもあった。

III 啓蒙とは何か

「自己と他者たちの統治」というテーマを掲げた、1983年度のコレージュ・ド・フランスにおける連続講義の第一回目で、フーコーはカントの『啓蒙とは何か』に立ち返り、真正面からそれに取り組もうとする。〈啓蒙とは何か〉という問いは、もはや以前のように批判という概念の系譜学的分析をとおして接

18) *Ibid.*, p. 53.

19) *Ibid.*

近されるのではなく、いまやフーコーの省察の出発点をなしているのだ。ここでの啓蒙への問いかけは、統治技法の全般化に対する応答としてというよりも、古代ギリシア・ローマにまで遡る〈自己の統治〉の問題系の一環として、その講義プランのなかに位置づけられていたものと推察される。当時、フーコーの探究の領野は、個々の身体を対象とする権力の微視的物理学（『監獄の誕生』）から、個人と人口の双方を同時に管理・調整する統治の技法（『知への意志』）をへて、主体化の様式の方へと移行しつつあった。また、それと相呼応して、古代ギリシア・ローマへの「迂回」——これを原点への回帰と誤解してはなるまい——がすでに試みられていたのであり、死の直前に刊行された『快楽の活用』においては、次のような問いが提起されることになろう。すなわち、「もし、人が自分自身を統治しないとすれば、どうして他人たちを統治するなどといえるだろうか」、²⁰⁾と。

5年前の講演がタイトルに据えるのをためらったすえに、その末尾で投擲していた〈啓蒙とは何か〉という問いを受けとめ、まさにそれを標題として採り取ったこの講義において、フーコーはカントのテキストを、「現代性^{モデルニテ}についての問いの新しい立て方」を提出したユニークな試論として把持しようとする。つまり、そこでは、現代性に関する問いが、「自己の現在性^{アクチュアリティ}に対する〈矢のかたちをした〉関係と呼ぶことのできるもののなかで」提起されているというのである。「私の現在性とは何か。この現在性の意味は何か。そして、私がこの現在性について語るときに、私は何をしているのか。まさしくこういった問いこそが、現代性についての新しい問いかけを成り立たせているものであると私には思える。」²¹⁾

このように、私が属しているこの現在性とは何か、その内部で私が語っているこのわれわれとはいったい何かといった一連の問いを立てようとする、「問いとしての現代性」の射出点が、カントのテキストのなかには見出されるので

20) ジル・ドゥルーズ『フーコー』、宇野邦一訳、河出書房新社、1987年、157ページ。

21) DE-351, p. 681 (邦訳、176-177ページ)

ある。「現代性という観念よりはむしろ、問いとしての現代性の系譜学をつくろうと試みる必要があるだろう。そして、いずれにせよ、もし私がカントのこのテキストをこうした問いの射出点として捉えるとしても、このテキストそのものがより広大な歴史のプロセスの一部であり、そのプロセスの広がり全体を測定する必要があることは言うまでもない。」²²⁾〈批判とは何か〉という問いを端緒とするかつての講演で企図されていたのは、まさに、統治技法の歴史的展開過程に対する批判的態度の現出という一般的なコンテキストのなかに、啓蒙の問いを位置づけることであった。だがいまや、この講義では、そのような作業の必要性を認めながらも、〈啓蒙とは何か〉という問いへのカントの答えのなかに認知される、現在性に対する独特の注視の仕方に議論の焦点が合わされているのだ。しかも、さらに興味深いことに、フーコーは、啓蒙という出来事へのカントのこの答えを、革命という出来事へのカントの答えと接合しようとするのである。

「1798年にカントは、いわば1784年のテキストの続編を作るだろう。」²³⁾つまり、フーコーの見解にしたがえば、カントはみずからの属する現在性についての問いかけを、『啓蒙とは何か? この問いへの答え』(1784年)では、〈われわれがそこに属している啓蒙とは何か〉というかたちで、そしてその『諸学部之争い』(1798年)のなかでは、〈革命とは何か〉というかたちで、二重に提起したのであった。

『諸学部之争い』は、多くの場合、歴史の目的論をめぐるカントの議論や、革命権に対するその批判との関連において読まれてきたと言えるだろう²⁴⁾。しかしながら、フーコーは、このテキストに内在している問いをよく理解するためには、それを『啓蒙とは何か』に接続させることが重要だと示唆しているの

22) DE-351, p. 681 (邦訳, 177ページ)

23) DE-351, p. 682 (邦訳, 178ページ)

24) cf. Lewis White Beck, "Kant and the Right of Revolution", *Journal of the History of Ideas* 32, 1971, pp. 411-422. Sidney Axin, "Kant, Authority, and the French Revolution", *Journal of the History of Ideas* 32, 1971, pp. 423-432.

である。なぜなら、両者はともに、「みずからの現在性についての問いかけ」に関与しているからだ。

「諸学部の争い」においてカントがフランス革命について議論するさいに関心を示している事柄は、〈革命とは何か〉という問いへの答えとして通常思い描かれるものとは必ずしも合致しないであろう。カントがフランス革命の分析に着手するのは、よく知られているように、〈人類にとって恒常的な進歩は存在するか〉という問いに答えようとする試みの一端としてなのである。カントによれば、その問いへの答えはひとえに、歴史のなかに、「かつてそれが作用し、いま作用しており、そして今後も作用するであろうということを示さねばならないような恒常的原因」の「しるし」を発見できるか否かにかかっている、とフーコーは言う。「それゆえ、進歩が存在するかどうかを決定することをわれわれに可能にしてくれるような出来事は、〈記念的、実証的、予測的〉なしるしとなるだろう。」²⁵⁾ しかもカントは、そのような出来事のしるしを、革命による激動のような「大いなる転変」のなかに求めようとはせず、「大きな政治的变化のドラマが起こっているときに、公共的にあらわれる注視者たち」の態度のなかに見出そうとするのである。カントが人類に備わっている「道徳的性格」の明証性を看取するのは、フランス革命が成功するか失敗するかという事実においてではなく、革命がその注視者たちのうちに呼び起こした「熱狂と境を接するほどの共感」においてなのだ²⁶⁾。

フーコーの関心は、「革命のいかなる部分が保存するのに適しており、また模範として引き合いにだすのに適しているかを決定し」ようとする企てから、カントのテキストを峻別することにある。哲学の任務は、革命の権利を正当化することに存するのではなく、「革命の企てそのものとは別のものである、この革命の意志、この革命に対する〈熱狂〉をどうすべきかを知ること」に存するのだ²⁷⁾。そしてまさにここにおいて、〈啓蒙とは何か〉という問いと〈革命

25) *DE*-351, p. 683 (邦訳, 180ページ)

26) *DE*-351, p. 685 (邦訳, 182ページ)

とは何か) という問いとが交叉するのである。それというのも、カントは、同時代の出来事としてのフランス革命がもたらした意義を、権利と正当性という問題設定に則って解釈するのではなく、革命に対する注視者たちの熱狂のなかにそれを見出したのと同様に、啓蒙に関しても、その理念を正当化することへと向かうのではなく、現在性のただなかで啓蒙とは何かと問いかけていたのだから。こうしたカント読解をふまえて、フーコーは——そこでハーバーマスのことを彼が念頭に置いていないと信じるのは困難なのだが——次のように言う。「啓蒙の遺産が生き生きと、無傷のまま保護されることを望む人々の信仰心は、そのまま彼らに委ねておこう。このような信仰心が、もっとも痛ましい裏切りであることは言うまでもない。保存しなければならないのは、啓蒙の残余などではないのだ。思考されねばならないものとして、つねに精神のうちに現前させ、つねに保ちつづけなければならないのは、この出来事、そしてその意味に対する問い(普遍的なものについての思考の歴史性に対する問い)なのである。」²⁷⁾

〈啓蒙とは何か〉そして〈革命とは何か〉というカントの二つの問いは、ともにフーコーによって、「われわれの現在性とは何か」と問いかける、「われわれ自身の存在論、現在性の存在論」として把握される。さきに見たように、こうした「現在性の存在論」は、1983年にコレージュ・ド・フランスで行なわれたこの講義の終わりの部分で、「真の認識が可能となる諸条件」を問う「真理の分析論」とともに、カントに由来する「批判の二つの伝統」をなしていると述べられていたのであった。ここでは、1978年の「批判とは何か」と題された講演で呈示されていた見解——すなわち、カント以降、またカントによって、批判と啓蒙との関係にずれが導き入れられたとするもの——が、カントの啓蒙と革命への問いのなかに置き直されることによって、新たな可能性を吹き込まれていると考えることができるだろう。つまり、「現在性の存在論」という批

27) *DE*-351, p. 687 (邦訳, 184ページ)

28) *DE*-351, pp. 686-687 (邦訳, 184ページ)

判的思考の内部で、批判と啓蒙とが螺旋状の関係を織りなすものとして、捉え直されているのだ。批判は認識の限界を確定する作業から現在性に対する問いかけの実践へと転位させられ、またそれと並行して、われわれ自身の現在性を問う啓蒙の問いはその可能的な乗り越えへと通じる批判の作業へと転位させられるのである。そして、このような批判と啓蒙との繋がりこそ、フーコーがカントの『啓蒙とは何か』を取り上げたその最後の講演において、探究の中心に置いていたものだったのである。

IV 批判と啓蒙の境界へ

コレージュ・ド・フランスでの講義からしばらくたった1983年秋にフーコーは、アメリカ合衆国において、同じく『啓蒙とは何か』を中軸に据えた講演を行なった。決定的な重要性をもつと思われるこの講演に関して、論点を絞りこみ一点だけ留意しておきたいのは、次のことである。すなわち、フーコーがカントのテキストの読解をとおして浮き彫りにしていた「現在の存在論」または「われわれ自身の存在論」という問いかけが、さらにその力線を延長させられ、「可能的な乗り越えというかたちで行使される実践的批判」と称される「積極的な問い」に接続させられるようになったということである。フーコーはこう言明している。「……外か内かという二者択一から逃れて、さまざまな境界に立たねばならない。批判とは、まさしく諸々の^{リミット}限界＝^{ゾーグレンツ}境界の分析であり、それらをめぐる考察なのだ。けれども、カントの問いが、認識が越えることを断念すべき^{リミット}限界＝^{ゾーグレンツ}境界とはいかなるものであるかを知ることであつたとするなら、今日における批判的問いは、積極的な問いへと反転されるべきだと、私には思われる。すなわち、われわれにとって普遍的、必然的、義務的な所与としてあたえられているもののなかで、特異的で、偶有的であり、また恣意的な拘束に起因するものの占める部分とはいかなるものなのか、と問うべきなのだ。要するに、必然的な限界画定というかたちで行使される批判を、可能的な乗り越えというかたちで行使される実践的批判へと、変容させることが問題なのだ。』²⁹⁾

こうしてフーコーにおいて「限界」という概念は、普遍的・必然的・義務的であるよりも特異的・偶有的・越境可能なものとして捉え直され、多種多様な変化に対して開かれた「境界」へと転位させられる。その結果、「必然的なものの、現在の諸限界＝境界」めがけて放たれる批判は、われわれがいま在るところのものに普遍性や客観性を保証するために、乗り越え不可能な限界をそこから引き出そうとする「超越論的」批判という形態ではなく、いかにして異質な諸要素から出発して特異的な出来事が偶発的に生成したのかを探究する、ニーチェ的意味での「系譜学的」批判という形態をとることを余儀なくされるだろう。「この批判は系譜学的なものとなるだろう。というのは、それが、われわれに行ないえない、あるいは認識しえないことを、われわれがいま在る形式から出発して演繹することになるのではなく、われわれがいまのように在り、いまのように行ない、いまのように考えるのではなくはやないように、在り、行ない、考えることができる可能性を、われわれがいま在るようにわれわれをして在らしめた偶有性から出発して、抽出することになるという意味においてである。」²⁹⁾

われわれをかく在らしめている偶有性に照準を合わせながら、現在のただなかで現在を批判することをみずからに課するような、「限界＝境界的な態度」。そうした態度を維持するかぎりにおいて、批判は、「自由の無限定＝無際限な作業を、可能なかぎり遠くまで、可能なかぎり広く推進することをめざす」ことができる³⁰⁾。しかしまた同時に、それが「自由の空疎な夢」に陥らないためには、その批判が「実験的な態度」によって裏打ちされたものでなければならぬ、と指摘するのを、フーコーは忘れない。「私が言いたいのは、われわれ自身の諸限界＝境界に立って実行されるこの仕事が、一方では、さまざまな歴史的調査からなる領域を開くものであるべきだということ、他方では、そこにお

29) *DE*-339, p. 574 (邦訳, 11ページ)

30) *DE*-339, p. 574 (邦訳, 11ページ)

31) *DE*-339, p. 574 (邦訳, 11ページ)

いては変化が可能であり、また望ましいものでもある諸々の地点を把握し、そして、その変化にあたえるべき的確な形態を規定するために、現実と現在性の試練をみずから進んで受けるべきだということなのだ。……それゆえ私は、われわれ自身の批判的存在論に固有な哲学的エートスを、われわれが乗り越えることのできる諸々の限界=境界についての歴史的—実践的試練として、したがってまた、自由な存在としてのわれわれ自身に対するわれわれ自身の働きかけの作業として、規定することにする。³²⁾

これはカントの問いを基軸とする最後期のテキストで述べられた一節ではあるが、多様な時代と領野を対象に繰り広げられたフーコー自身の一連の仕事の核心へと、そのまま送り返されるべきものであると思われる。いいかえるなら「われわれ自身の批判的存在論」という問いの執拗かつ綿密な練り上げの過程にこそ、フーコーの思考=試行の移動の軌跡が閃光のように映し出されているのではなかっただろうか。フーコーにとって思考は、解釈や確言に先立つさまざまな問いかけの試みにほかならず、また自由は、未聞の問題提起的な諸力と連動した多数多様な変化を実現するための実験作業と不可分なのである。この意味で、ピエール・ブーレーズを讀んだ次の言葉は、まさしくフーコーその人の自画像として読まれるに相応しいものでもありと言えよう。「彼が思考に要求したのは、かくも綿密に調整し、かくも深く省察したうえで彼の行なうゲームにおいて、新しい自由な空間を切り開くことであった。……思考の役割とは……すなわち、諸々の規則を破る力を、それらを働かせている当の行為そのもののなかに生じさせることなのである。³³⁾

思考のそうした仮借ない役割を一定の歴史的社會空間の内部で行使するにあたり、フーコーは、いかなる事前の明証性や帰属性をも必然的ないし固定的なものとはみなさない批判的態度を貫くと同時に、恣意性と歴史主義のいずれに

32) DE-339, pp. 574-575 (邦訳, 11-12ページ)

33) DE-305, Pierre Boulez, *l'écran traversé*, p. 222 (笠羽映子訳「突き抜けられた画面」, 『ユリイカ』第27巻7号, 青土社, 85ページ)

も陥ることのない方法論的立場に身を置こうとした。すなわち彼は、普遍的本質を備えた「狂気」・「病」・「犯罪」・「性」などから出発し、それらの実体の変状として個別具体的な諸実践を説明しようとする歴史主義的立場をしりぞけ、その代わりに、実効的な諸実践から出発し、自明かつ必然的とみなされている諸々の事柄と多様な歴史のプロセスとの恣意的ではなく複合的な繋がりを浮き彫りにしつつ、もってそれらの事柄を特異的な効果ないし出来事として解析するような、系譜学的批判の立場を採り取ったのである。

このような立場にたつかぎり、〈啓蒙〉のプロジェクトもまた、普遍のおよび全体的な企てとしてではなく、それ自体「一個の出来事」として、つまりは「諸々の出来事と複合的な歴史のプロセスの総体」として把握されることになる。しかも、啓蒙を形づくるそうした総体は、「社会的変容の諸要素、政治的制度の諸タイプ、知の諸形態、認識と実践の合理化の諸計画、テクノロジーの諸変動を含む」ものであるのだから、啓蒙に対して賛成か反対かを迫る「単純で権威的な二者択一」は意味を失うことになる³⁴⁾。それゆえ、試みられるべきは、啓蒙の遺産を不可侵なものとして信奉しつつけることでも、啓蒙がその反対物としての野蛮へと不可避免的に転化してしまう過程を原理的に再構成することでもない。そうではなくて、啓蒙の必要不可欠性と同時にその内在的な危険性へと絶えずわれわれを立ち返らせる内的緊張を見据えながら、啓蒙の企図に忠実でありつつけることによってそれを乗り越えようとする螺旋状の運動に身を投じる、批判的思考こそが試されねばならないのだ。

「私は、今日、批判の作業が、啓蒙の光への信仰をなお含むものだと言うべきかは知らない。私が考えるには、批判の作業は、われわれ自身の諸限界＝境界に対する働きかけを必要とするものであり、つまりは、自由を待ち望む性急さに具体的なかたちをあたえることができる忍耐強い仕事を必要とするものなのである。」³⁵⁾ フーコーはこのような言葉で、「啓蒙とは何か」と題さ

34) *DE-339*, p. 571-572 (邦訳, 10ページ)

35) *DE-339*, p. 578 (邦訳, 13ページ)

れた合衆国での講演を結んでいたものであった。〈批判とは何か〉から〈啓蒙とは何か〉にかけて、カントのテキストに繰り返し立ち返りながら、フーコーは批判と啓蒙の境界を見極めようとつとめた。そのような境界域においてこそ、「新しい自由な空間」が切り開かれ、〈いかにして統治されないか〉という問いと、〈いかにして、いま在るわれわれから、われわれを解放するか〉という問いとが接合されうるのである。個人的かつ集団的な自由へと開け放たれたさまざまな実験作業が試行可能となるのは、統治技法への抵抗と同一性からの離脱が出会う中間地帯、両者が相互浸透する混成領域においてであろう。そして、それら多種多様な実験が合流し、共鳴し、反発しあう干渉地帯のなかで、諸力との不断の折衝がつづけられるのだ。批判と啓蒙の襞に寄り添いながら試みられたフーコーの一連の分析は、まさにそうした「自由の無限定＝無際限な作業」と連結していたのであり、また同時にそれ自体が、「自由を待ち望む性急さに具体的なかたちをあたえることができる忍耐強い仕事」の一つのアレンジメントにほかならなかったのである。